

「重症患者の在宅医療」 (仙台往診クリニック (宮城県仙台市))

1 概要

「仙台往診クリニック」は、1996（平成8）年1月に開設した在宅医療専門診療所である。仙台市及び周辺市町村を対象に、寝たきり老人や難病・がん患者などの在宅医療を行っている。現在常勤医師5名、非常勤医師5名、看護師5名、非常勤放射線技師1名、事務員7名で運営が行われている。勤務はシフト制を取っており、平日日中は医師4名・看護師4名、平日夜間は医師1名、土日休日は医師2名・看護師2名の体制が取られている。

2 取組内容

2007（平成19）年3月現在で190名の患者は、基本的には病院からの紹介患者となっているが、その内訳は、在宅人工呼吸器装着者33名、酸素濃縮装置などを用いた在宅酸素療法患者55名、血管から直接栄養を注入する中心静脈栄養患者10名、胃ろうなどを用いた経管栄養患者67名と、一般の病院以上に重症患者の多い構成となっている。

重症患者に在宅医療を行うため、①急変時の対応、②看護・介護サービスの確保に努力している。

1) 急変時の対応

週1回以上（がん末期患者は週4回以上）医師による定期往診を行う場合が多い。しかし、重症患者は病状が急変しやすいため、医療提供側もそれに対応できる体制整備が必要である。仙台往診クリニックでは24時間・年中無休体制を取るために、医師・看護師・事務員はシフト制が取られている。また、毎朝患者宅からクリニック指定の様式でFAXを送ってもらい、症状を随時確認している。さらに、毎朝行われる医師・看護師によるミーティングにおいても、その日の新規患者、症状に変化があった患者、定期訪問する患者について、ケースごとに綿密な検討が行われている。

急変時の対応としては、日中はまずクリニックで連絡を受け、事務員が患者宅に最も近い医師ないし場合によっては連携する訪問看護ステーションの看護師に連絡を取り、患者宅に駆けつける。夜間には当番医の携帯電話に直接連絡が入るようになっており、当番医が患者宅に駆けつける。また、救急治療を望む場合、クリニックの医師が患者の紹介元病院の救急外来に病状を含めて連絡することで、病院へのスムーズな搬送が可能となっている。

2) 看護・介護との連携

在宅療養する患者にとって、医師による在宅医療と並んで、看護・介護サービスも必要不可欠なケアであると仙台往診クリニックでは考えている。

看護・介護サービスとの連携方法として、サービス担当者会議を重視している。これは、多くは病院側又は仙台往診クリニック側が主導して、退院予定の患者のベッドサイドにお

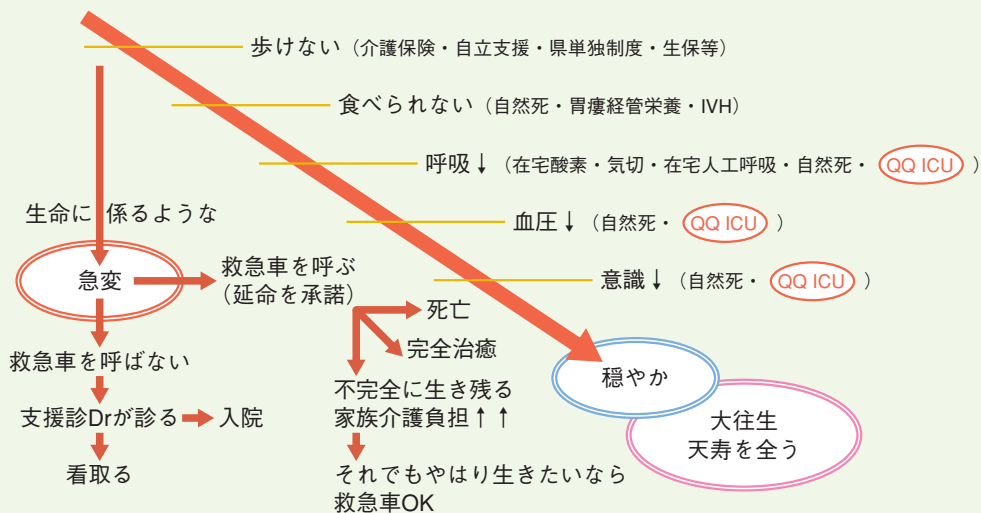
いて、訪問看護ステーションの看護師、ケアマネージャー、訪問ヘルパー、介護機器や入浴サービス業者、薬剤師、家族などを交えた打合せを行い、患者のケアの方向性を決め、スムーズな在宅医療への移行を図っている。

3) 患者の納得のいく医療提供

重症患者の在宅医療においては、発症前の元の身体状態に戻ることは少なく徐々に身体状況が衰えることから、どこまで延命治療を望むかという問題があり、医師がどのように患者やその家族等に説明するかが問われていると仙台往診クリニックでは考えている。

多くの病院の医師は病気や治療内容についての説明はあるものの、その治療を行うことで患者及び患者の家族の生活・生き方がどう変わるのか説明がなされていない。仙台往診クリニックでは、以下の資料（図表1）を基にすべての患者に対して、今後どのように病状が変化し、治療を行ったり医療機器を装着したりすることでどのように生き方が変化するかを、家族の実情に合わせて説明方法を変えながら2時間程度にわたってじっくり説明し、その上で患者や患者の家族自身に自らの治療方針や生き方を判断してもらうこととしている。患者や家族の考えは変化しうるので、急変時には再度確認を行っている。このような説明をすることにより、患者の納得のいく医療の提供につながっている。

図表1 人間の生き方（看取り）緩急の図
＜生き方は二つしかない＞



(注) 図表中「QQ ICU」とは、「救急病院 集中治療室 (Intensive Care Unit)」の略称である。

3 成果

病院の集中治療室や重症室から直接仙台往診クリニックの在宅医療に移行する者が年間50名（2006（平成18）年時点）になるなど多くの難病患者を在宅で看取りまで行っている。

また、急変時における患者の搬送先について、開業当初は、病院への営業活動を行い、搬送先になることについて病院の医師に直接お願いをしていたが、現在では、在宅医療や

当診療所に対する理解が深まるとともに、病院側も在院日数短縮のため連携診療所の獲得に熱心なこともあり、紹介元病院の患者受入れに際しては支障が生じていない。